

鷗外「舞姫」論拾遺

和田 繁 二 郎

一

「舞姫」の中に書かれた、豊太郎の近代的な目覚めは、そのまま鷗外のものであり、またそれは、十分に近代的名ものであつたと言えよう。例えば次の記述である。

久しくこの自由なる大学の風に当りたればにや心の中なにとなく妥ならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を改むるに似たり

これを論者のある者は、当時のドイツが帝政治下のしかも社会党弾圧法の敷かれた状況にあつたことをあげて、その近代性を信じようとしないのであるが、「独り独逸の大学は、同じく政府の保護を受け、之が為めに干渉せらるる所なきに非ずと雖も、英吉利の保守と仏蘭西の革命との間に立て、能く内部の自由

を維持したり」(「大学の自由を論ず」と言

い、英国の大学が政府や宗門の干渉を強く受け、仏国の大学が官吏の養成機関にすぎないことを説いているところを見れば、決してヨーロッパ中に於ても近代的精神において、劣るものとは見えない。また人間関係においても、その皇帝と人民との関係をみるのに、鷗外とドイツで交際があり早く帰国した人から、森家の人々が写真などによつてベルリンの様などを聞く場面が、参考になるであらう。

独逸の市街、官舎、学校、公園などの写真をとつて持つて来て一々説明して下さいました。中で一番お父様を驚かしたのは皇居の事でした。ウンテルデンリンデンの幅二十余間もある大通りを隔てて、皇居と大学とが向あつて居ます。(中略)皇居も大学も二階建てで、(中略)その歩道に近い一階の角がウキルヘルム大帝のお居

間なので、柏林の案内記に、老帝は毎朝十時には、窓際の机に寄つてゐられるのがよく見えると書いてあるさうです。(中略)何か事のある時は、市民が其の前の広場に集つて、ホオホ、ホオホと呼べば、老帝は折れ曲つた角の鳶の絡んだ露台に出て会釈をされるのです。(小金井喜美子著「森鷗外の系族」森於菟に)

この皇帝のあり方に森家の人達は、日本と比べて「あまりにかけ離れてゐるので皆呆れて」しまふのである。やはり日本の天皇制下とは比較を絶した新しさと言わねばならない。鷗外の新しさが、こういう雰囲気でのような刺激をうけたかは想像できるところである。後に、「かのやうに」(明治四五年)の中で、神話と歴史との分離を論ずる彼の形成はこの間の体験と無関係ではないであらう。

二

「舞姫」の文体の効果、あるいは描写力については色々と評価されているが、その描写的確さ、その対象把握の新鮮さとそれに伴う真实性は、やはり高度なものと言へる。クロステル巷の古寺の前で、豊太郎が、は

じめてエリスにあつた時のエリスの描写、「この青く清らにて物問ひたげに愁を含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に掩はれたるは云々」のところはよく引用されているが、次のところはあまり注目されていないようだ。

「君が家に送り行かんに、先づ心を鎮め玉へ。声をな人に聞かせ玉ひそ。こは往来なるに。」彼は物語するうちに、覚えず我肩に倚りしが、この時ふと頭を擡げ、又始てわれを見たるが如く、恥ぢて我側を飛びのきつ。

悲しみのあまりに、前後を知らず、豊太郎の肩に倚つていたエリスが、心付いて恥じらうところで、微妙なところを描いたと思う。

「恥ぢて」という説明は蛇足だが、男女の交渉で、こういう微妙を把え得たのは、当時の作品としては、絶無ではないかと思う。

彼は涙ぐみて身をふるはせたり。その見上げたる目には、人に否とはいはせぬ媚態あり。この目の働きは知りてするにや、又自らは知らぬにや。

エリスが、窮境を訴え、金を借し与えんことを豊太郎に懇願する風姿である。おしまいの説明には、処女の清純な媚態が、いささか

距離をもつて観察されている。読者にはこの媚態をよりよく理解させはするが、少々冷静すぎるという印象をうける。これは渦中にあつた豊太郎ではなく、それを追懐している豊太郎が、こういう描写を生みだしたのである。これがかえつて、客観的な把握と描写を助けているように思う。

そのほか、豊太郎がロシアの旅より帰つてきたときのエリスの様子にも、情緒豊かなものがあるが、このあたりほどの微妙さはないようである。それは、豊太郎の、立身に向つて引裂かれた心情に描写の重点が移つていつたからだと思える。

これらの描写は、西欧文学作品から学ぶところも多かつたかと思うが、やはり、実在のエリス、そのほかの女性との交渉に際して体験したところを生かしたかと思う。その際、鵜外独自の冷静を失わぬ深部の目が、どんな時にも曇らされていなかつたのではないかと思う。

三

当時の文壇で、日本人が外国人と恋愛、もしくは結婚することを書いた小説は、あまり

例がないようである。管見のなから、メモを繰つてみると、須藤南翠の「遠征贖の旗風」(明治二〇年七月—九月、改進新聞)へ後に「旭章旗」と改題)と、山田美妙の「空行く月」(明治二二年三月—二二年一月、「いらつめ」)が見つかつた。

「贖の旗風」は、当時では珍しい南方進出の冒険小説で、主人公は海軍大尉八嶋健夫、地理学者の塊一、財政学専攻の文三の三兄弟で、健夫と文三は海路ヨーロッパへ行く。その途中印度洋上で難船、漂流し、某孤島に上陸し、その長官となり、新しい日本領土を確立する。それまでに塊一は陸路ロシアに向い、地理学の勉強をするうち、アデリナンというロシア娘と親しくなる。その父親が南洋で難船したという報を得、また健夫・文三の行方不明も知り、アデリナンと共に、南洋に向う。そうして、先述の孤島を探りあて、アデリナンは父にめぐりあい、塊一は健夫・文三の両者にめぐりあう。そこで、塊一はアデリナンと結婚し、その新領土の統治に力をあわせる、という筋である。およそ荒唐無稽に属する冒険小説で、小説自体、近代小説には珍しい冒険的ロマンを認めるほか取得のな

い作品である。

「空行く月」は桂弓之助という少年（十六歳—十九歳位）が主人公で、弓之助は、父母に死別し、父が恩誼をほどこした望月十五郎の世話になっている。彼は海軍に志願し許婚同様の望月の娘、お輝（おてる）を日本に残して、遠洋航海に出る。ところが、地中海航行中に、仲の悪い同僚に海中に投げられ、イタリーの海岸に流れつく。そこを、別荘に来ていたイギリス娘美麗、（メレー）に救われ、看護をうける。そして、弓之助はお輝を懐しく思い出しながらメレーと親しくなり、そのうちにメレーの方がむしろ積極的に弓之助を求め、一方日本では、弓之助の行方不明が伝えられ、お輝は、新しくおこった結婚話しに心を悩ます。

ここで話は中絶してしまつてゐるが、この作品は、前者より現実的な素材によつてゐるだけにかえて、不自然なところの多い作品である。第一、弓之助の海軍志願の理由がはつきりしない。仲間、海に投げられる時、弓之助は寝たまま、釣床ぐるみ海中に落とされ、というのだから、奇妙である。また、メレーに助けられて後、日本へ連絡を怠つてゐる

のも不自然であるし、身体が恢復してゐながら、またお輝を思いながら帰国しようとしてゐるのは極めて不思議である。この後どのように話を展開させ、主人公たちをどう始末するつもりだつたかわからないが、お伽噺然とした作品で、美妙の愚劣さを示すほかにものでもない。

このほか、松の家みどりの「桜と薔薇」（明治二〇年刊）があるが、これは男が米人で女が日本人である。十数年来横浜で貿易を営んでいたローズが、商用で渡米したが、事業に失敗し帰れなくなる。許婚者のお信は他の誘惑に打ちかかつて操を守り、数年後、めでたく結ばれるというロマンのかつ、戯作的な作品である。

これらの作と「舞姫」とを比較すると、全く雲泥の差というより致方がない。むしろ、これらは文学ではないという感を強くする。比較すべからざるものと言ねばならない。それほど「舞姫」は、時代を絶した近代性と、完成の美しさを持っているのである。

× × ×
なお本稿は、「立命館文学」本年九月月号に発表した「鵬外『舞姫』試論」の拾遺である。

論究日本文学 第十四号 (36・3)

近松と観客 村田 穆

大和申楽の芸質(上) 味方 健

透谷私論 白井 伸昂

発 話 長田 久男

一茶の写生語に関する考察(二) 小嶋孝三郎

古典単元設定の視点 水田 潤

書 評 国崎望久太郎著「啄木論序説」 相楽 俊暁

× × ×

論究日本文学 第十五号 (36・9)

須藤南翠の「雛黄鸝」 和田繁二郎

堤中納言物語「このついで」 土岐 武治

の典拠について 味方 健

大和申楽の芸質(中) 「むつかしい」と「むずかし

い」と 東辻 保和

——語形確定をめぐって——

書 評 黒住 嘉輝

土橋寛著「古代歌謡論」